

2021 年 2 月 28 日（日）「聖書的人間観の向かうところ」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:25-29

- 25 心を転じて、私は知恵と道理を知り、見
いだし、突き止めようとした。そして、悪
は愚行、愚かさは無知であると知った。
- 26 私は見いだした、女は死よりも苦いと。女
は罫、その心は網、その手は枷。御心に
適う人は彼女から逃げ出すことができる
が、罪人はこれに捕らえられる。
- 27 「見よ、これこそ私が見いだした」とコヘレ
トは言う。一つ一つ積み重ねて見いだし
た結論。
- 28 私の魂はなおも探し求めたが、見いださ
なかった。千人の中に一人の男を見いだ
したが、これらすべての中に一人の女も
見いださなかった。
- 29 ただし、見よ、これを私は見いだした。神
は人間をまっすぐに造ったのに、人間は
さまざまな策略を練ろうとするのだ。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:25-29

- 25 私は心を転じて、知恵と道理を学び、探
り出し、探し求めた。愚かさの悪と、狂気
の愚かさを知ろうとした。
- 26 私は、女が死よりも苦々しいことに気が
ついた。女は罫であり、その心は網、そ
の手は、かせである。神に良しとされる
者は女から逃れるが、罪に陥る者は女
に捕らえられる。
- 27 伝道者は言う。見よ。私が道理を見出そ
うとして、一つ一つに当たり、見出したこ
とは次のとおりである。
- 28 私のたましいは、なおも探し求めたが、
見出すことはなかった。私は千人のう
ちに、一人の男を見出したが、そのすべ
てのうちに、一人の女も見出さなかった。
- 29 私が見出した次のことだけに目を留めよ。
神は人を真っ直ぐな者に造られたが、人
は多くの理屈を探し求めたということだ。

【序論】

今日を含め、1 月に入ってから 8 回かけて 7 章全体を学んでまいりました。本章の結
論として、「人間とは如何なる存在であるか」という所謂「人間論」が扱われています。
そして、今日の箇所では特に男女関係における人間の罪の問題が取り扱われています。こ
こに書かれている内容を解釈なしに読んだとすると、多くの女性に不快感を与えるもの
となってしまうでしょう。私自身もコヘレトが何を言っているのかを理解するのに多く
の時間を要しました。いろいろと感じながら先ほどの聖書朗読をお聞きになったかもしれ
ませんが、一度先入観を脇に置いて、今日の御言葉の本意を聞き取っていきたいと思
います。

【本論】

まず、今日の箇所には散りばめられた三つのキーワードに注目しましょう。

- ①探求する (שָׁקַח／バカーシュ)
- ②見つける (מָצָא／マーツァー)
- ③物事の総括〔道理〕 (חֲשֹׁבֶנָה／ヘシュボーン)

コヘレトは「人間とは如何なる存在であるか」を探求した結果、思わぬ結論に到達してしまうのです。それは、人間の愚かさ、罪深さでした。今日の箇所を分析すると、次のような構造になっていることが分かります。

- A. 基本的な人間観の発見 (25 節)
- B. 男女の等しい愚かさ (26 節)
- A'. 基本的な人間観の確認 (27 節)
- B'. 神の目から見た男女の等しい愚かさ (28 節)
- A''. 基本的な人間観の根拠 (29 節)

A. 基本的な人間観の発見 (25 節)

心を転じて、私は知恵と道理を知り、見だし突き止めようとした。

そして、悪は愚行、愚かさは無知であると知った。(7:25)

「見出す」(חָקַח／トゥール)、**「突き止める」**(שָׁקַח／バカーシュ) という二つの類義語が並べられていることから、コヘレトが**「知恵と道理」**というものを探しに探したということが分かるでしょう。世界中の文献に当たり、人間全般に共通した性質を見つけ出したということだと思われます。私は**「道理」**という言葉**を「物事の総括」と訳してもよいと考えています。「人間とはこういうものだ」という結論です。残念ながら、その答えは美しいものではなかった。調べてみた結果、人間とは「悪は愚行、愚かさは無知」としか言いようのない存在だったとコヘレトは言います。ここでは名詞が二つずつポンポンと並べられているだけなので訳しにくい部分ではありますが、思い切って意識してみますと、「悪は愚行として現れる。愚かさは無知に基づく」とできるでしょうか。**

何とも哀しい見解ではありますが、これはまさしく聖書的人間観そのものです。聖書は冒頭から人間の愚かさを語り始めている。

B. 男女の等しい愚かさ (26 節)

私は見いだした、女は死よりも苦いと。女は罟、その心は網、その手は枷。御心に適う人は彼女から逃げ出すことができるが、罪人はこれに捕らえられる。(7:26)

ここで語られている事柄を注意深く読み取りましょう。中心にいる話し手は男性です。男性全般にありうる女性に対する弱さの詩的表現と言えます。男性というものは女性に弱く、一時の感情に身を任せて行なったことが、厄介な刈り取りを身に招いてしまう可能性を持っていることは否定できません。コヘレトの念頭にソロモンの経験があるとすれば、彼は 1000 人もの女性と関係を持ち、その結果国を分裂させたことが思い起こされます。女性の甘い誘惑に心を奪われた男の弱さを著者は知っていた。今自分がこういう行動を取ったら、未来にこういうトラブルが生じるだろうということがボンヤリと予想されながら、それでも自らを盲目にし、自制心のない行動に走る愚かな男の姿を描こうとしているのでしょう。

注意深く読みましょう。コヘレトは物事を一般化して語っているのです。しかも、極めて曲がったモノの捉え方をし、基本的に男性は女性に弱い生き物だということを読者に伝えようとしている。理性を失って女性の誘惑に身を任せてしまう男性の愚かさを先鋭化しているのです。よって、コヘレト自身を含め、人間は（女性も同じだと思いますけれども）異性との関わりにおいて失敗しうる存在であるということを語っていると捉えるべきでしょう。

しかし、「御心に適う人は彼女から逃げ出すことができるが、罪人はこれに捕らえられる」ということも添えられています。ここで言われている「御心に適う」とは、倫理的な意味ではなく、神の選びの領域にあります。救いにあずかった人には、罪に打ち勝つ力が与えられる。目先の誘惑に陥りそうなとき、神の助けによって正しい道に引き戻されるということが言われているのでしょう（ヨセフの例）。

A'. 基本的な人間観の確認 (27 節)

「見よ、これこそ私が見いだした」とコヘレトは言う。一つ一つ積み重ねて見いだした結論。
(7:27)

ここでは「A」の主題である「基本的な人間観」が再確認されています。つまり、「人間とは愚かな存在である」ということです。「結論」と訳されている言葉は原文では「חֲשׂוֹן／ヘシュボーン」で、25 節で「道理」と訳されていた言葉と同じです。因みに、新改訳 2017 では「道理」と訳されていて、一貫性があります。

「一つ一つ」という部分は正確に訳されています。コヘレトは様々な文献に当たって人間を学んできた。実際にその目でも見てきた。自分自身を客観視してもみた。その結論として、「嗚呼、なんて愚かなのだ…」と嘆息しているのです。

B'. 神の目から見た男女の等しい愚かさ (28 節)

再び「B」に戻ります。26 節の内容が更に先へ進んでいく。

私の魂はなおも探し求めたが、見いださなかった。千人の中に一人の男を見いだしたが、これらすべての中に一人の女も見いださなかった。(7:28)

この箇所をそのまま読むならば、数は僅かではありながらも男性優位の見解が立てられているように見えてしまうでしょう。事実、コヘレトが生きていた頃のユダヤ社会では、女性や子どもは部族の数に数えられないほど小さく見られていました。そのような背景がまったくないとは言いきれません。ウーマンリブ運動以来、女性の社会的進出が進み、今や、男は外で働き女は家事に従事するという考え方はナンセンスです。女性の働きなしには社会は到底回っていきません。教会もそうです。そういう時代にあってこの言葉を声高に語ったら、聖書自体の価値が疑問視されてしまうでしょう。

では、実際にここではどういうことが言われているのか。コヘレトは明らかに皮肉に満ちた言い方をしているのですが、千人の中に「知恵ある者」が1人いるかないかにおいて、神の目から見れば男女の差異はない。人間全般が罪ある存在であるということを言っているのです。このことをより良く理解するために、29 節を見てみましょう。

A''. 基本的な人間観の根拠 (29 節)

ただし、見よ、これを私は見いだした。神は人間をまっすぐに造ったのに、人間はさまざまな策略を練ろうとするのだ。(7:29)

本節とよく似たことが語られている聖句が二箇所ほど思い浮かびます。

主は、地上に人の悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くのを見て…。(創世 6:5)
これは、ノアの時代に起きた洪水の根拠とされている聖句です。人間の心は常に悪に向かって傾いている。何事をなすにも罪が入り混じっている。そういう存在であることを言い表しています。更に遡って、創世記 3 章のアダムとエバの罪の押し付け合いを見てみましょう。彼らが主の命令に背き、禁断の木の実を食べた後の出来事です。

その日、風の吹く頃、彼らは、神である主が園の中を歩き回る音を聞いた。そこで人とその妻は、神である主の顔を避け、園の木の間に身を隠した。神である主は人に声をかけて言われた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「私はあなたの足音を園で耳にしました。私は裸なので、怖くなり、身を隠したのです。」神は言われた。「裸であることを誰があなたに告げたのか。取って食べてはいけないと命じておいた木から食べたのか。」人は答えた。「あなたが私と共にいるようにと与えてくださった妻、その妻が木から取ってくれたので私は食べたのです。」神である主は女に言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたのです。それで私は食べたのです。」（創世 3:8-13）

神の命令に背いた人間は、罪を認め自ら責任を負うという能力を失ってしまいました。そして、罪の押し付け合いをし、次々と言い訳を考え出します。コヘレト 7:29 に出てくる「策略」という言葉（חֵשֶׁב / ヒシャーボーン）の原意は「発明」であり、人間が自分を正当化するためには天才的にあれこれ考え出すことを言い表しています。この性質は男女を問わず備わっており、罪人であることを最もよく証ししています。

【結論】

今日の箇所全体を学び終えて私たちの脳裏に残るのは、人間の愚かさばかりかもしれませんが。そんなにもけなされて終わってしまってよいものなのか。聖書はそのような悲観的な思想ばかりを語っている書なのか。そうではありません。私たちにとってどうして救いが必要なのかを認識できるようになるためには、このような人間観を理解することが不可欠なのです。自分に知恵があると思っているうちは、人は救いを求めないでしょう。しかし、アダムとエバのやりとりのうちに自らを見出す人は、自分の心の汚れを知り、どんなに救いが必要な存在であるかが分かるでしょう。聖書の目的は、読者を罪から贖うことです。私たちもまた、へりくだって罪の赦しを求めたいと思います。そして、神の側で用意してくださった十字架の贖いを握りしめようではありませんか。

【祈り】

人の心を知られる神よ。私たちは、自分の心の内に潜む様々な欲望を知っています。それを露骨に表面に出す人は少ないですが、言語化しない形で世界に満ちています。聖書にはそのすべてが描かれています。そして、私たちはアダムとエバの末裔であることを知ります。このような私たちを憐れみ、罪より贖ってください。一人びとりが自らの問題を見つめ、人を赦し、尊重して生きるができますように。それぞれに託されている神からの使命に目が開かれ、神に対して忠実に歩むことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
創造のはじめより、戒めに背き、恥を負うべき者となった人類を憐れみ、皮の衣で覆い給うた、父なる神の愛、
自らの罪を知る者に「義の衣」を着せ、御前に聖なる存在として立たせ給う、主イエス・キリストの恵み、
負うべき責任を負う勇気を与え、あらゆる誘惑より離れさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。